

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 161 回 あなたは一日、何回怒りますか？

2006.8.6

人間怒っている時の顔、かなり醜<sup>みにく</sup>い顔をしている。感情が剥<sup>む</sup>き出しになり、明らかに「動物」の顔になっている。節度ある教養人は、めったにこんな顔を、人前で見せることはない。今<sup>いま</sup>時の現代人は、老若男女、ストレスの塊<sup>かたまり</sup>なのか、やたらよく怒る。怒ると言うより突如として「キレる」と言う現象は、昔なら、ごく一部の限られた人種しかやらなかったような気がする。どうも、世間、カルシウムが不足しているのかもしれない。

「怒る」ということが、どれだけ相手に効果を与えるものだろうか？ 怒ることで物事が決する社会、解決する世界も確かにある。しかし、多くの場合、怒ったからといって、物事がうまく動くことはなくなってきたようである。日常の会社や家庭においても、怒ったからといって部下や、女房（夫）、子供達が、素直に言うこと聞くか...そんな事なかった経験、多分思い出すであろう。

経営や組織の中で解決を目的に怒ることは、管理的一手法かもしれない。が、怒る効果が必ずしも、そううまく発揮できないとしたら、怒らない努力と工夫、怒らない我慢と辛抱をすることが「経営教養」として大きな要素となってくるはずである。

怒らないこと...簡単に言うが中々大変なことである。感情を殺して、相手の心とコミュニケーションする。言葉尻や屁理屈を述べ合うと、必ず感情が理性を超えてしまう。感情同士で渡り合ったら、解決策は見出せない。感情を殺す努力、正に、教養に関わってくる。

そしてこの教養をベースにしたコミュニケーションこそ、今の現代人に最も必要な要素の一つと思われる。さらに肝心なことは、ここで発生するストレスを、決して溜めてはいけないという事である。自らストレスを解消できないでいる限り、冒頭の悪循環。自分なりのストレス解消法をもってこそ、初めて「教養」となりえると考えている。

どうせ怒るのなら、それなりの効果を発揮すべき怒り方をしなければならないはず。感情むき出しの「怒り」には、何ら効果を期待できないだろう。

「世の中で一番みじめなことは、人間としての教養のない事です。」(福沢諭吉『心訓』より)とは、小生の書齋に掲げてある言葉の一部である。

経営教養とは、怒ることと怒られることの違いが分かることであろう。怒られた人の心を理解しながら怒れる人、これが経営教養人であり、効果としての怒り方もかもしれない。怒る激情より、怒らない厳しいまでの理性、怒らないが結果、やるべきことはやっている...そんな強靱な経営者こそ、真に、経営教養を身につけた立派な人間と言えるのであろう。

いつも端正なお顔をした「仏の飯島さん」、そんなニックネームを頂ける日を目指し、邁進するつもりだが、つい、怒りっぽくなっている中高年おじさんの今日この頃である。